

シーの思想を示すものでもある。

(5) 林先生は本誌No49 (1999. 7. 31) の「日米新ガイドラインと想像力の欠如」と題する一文において、「戦争協力法としての日米新ガイドライン関連法を作った人々・・・に欠けているのは、『後方支援』をふくむ戦場での人間的悲惨への想像力である」と述べている。この「想像力の欠如」は、日本国憲法の平和主義に関する「創造力の欠如」を意味するものとして読み替えることもできる。それは、本年5月にハーグで開催されたN G Oの「市民平和会議」のアピール (the Hague

Appeal for Peace Civil Society Conference) において確認された「憲法9条の世界化」に向けての「創造力の欠如」を意味する。

(6) 林先生の問題提起を「民際」協調主義の観点から再構成し、「憲法9条の世界化」に向けて、金沢大学を中心とした活動から世界的な活動へと視野を拡大していくこと、それが「金沢大学平和問題ネットワーク」の課題である。

導きの星失いし仕事場に

凜と咲きにし一輪の百合 (孤舟)

(金沢大学法学部教授)

India Loses a Friend

G. Balatchandirane

お元気で活動的であった林教授の御逝去の連絡を、信じられない思いで受けた。敬愛すべき先生であり、同志であるばかりでなく、インドの発展と社会的課題について心を砕いてくれた真の友を失い、私たちは非常に深い悲しみを覚えている。

彼は私の所属する学部 (デリー大学 Department of Chinese & Japanese Studies) に数ヶ月にわたり滞在したのだが、学問の面においても、人間性の面においても、彼が誠実であったことが思い起こされる。彼のセミナーは十分な事前準備がなされ、質問には誠意を持って答えてくれた。学部スタッフに対しても日本語によるセミナーが開かれたのだが、そこでも彼は鋭い論点を数多く提供してくれた。私は、インドと日本において彼に指導を受けた一人として、彼が学問の分野に限

らず、人間としてもかけがえのない存在であったことを、改めて思い知るのである。

彼は、その愛すべき人柄のため、学生、教官の間ですぐに人気者となった。彼は非常に親しみやすく、堅苦しいところがなかった。食堂でお茶を飲みながら、学生や教官と入り混じり、よく議論したものだ。こうした議論のなかで、私達は彼から非常に多くのものを吸収したのだった。

彼がもういなくなってしまったのを認めたくない理由がある。それは、彼が学問の視点からのみでなく、一人の人間として、インドが速やかに発展できる方策を熱心に私達と論じ合うくらいに、インドへの非常に深い関心を持つようになっていたからである。彼はインド社会で虐げられている人々に常に関心を寄せ、彼らの生活をどう向上させるかについ

て思案していた。

幸運にも私は、彼の指導を受けることができたわけだが、なかでも彼と共同調査を行うことができたのは、本当に恵まれたことだった。私は、日本が米の輸入を自由化しない理由を問いかけたことがあるのだが、その時彼は、日本を擁護するのではなく、日本の農業が様々な要因によって現状に至ったこと、そしてそれによって米の輸入を最小限にとどめざるを得ないことを、じっくり説明してくれた。後に自分でいくつかの文献を読み、彼の説明がいかに重要な内容であったかを理解したのであった。私が金沢大学経済学部の客員研究員となった際に、彼は日本の農業の保護主義についての共同調査を進んで行ってくれたのだが、この問題に関して、連名で論文を書いた際の情報収集で彼が見せた徹底した姿勢と熱心さを、私は今でも覚えている。

彼とインドとの関わりは、日本に帰国した後も変わることはなく、彼は多くの雑誌を購読し、インドの最新情報に通じていた。インドの情勢について、の素材をいろいろ集めていたようだったが、彼がそれをひとつの成果

にまとめることはついになかなかつた。彼と暉峻衆三氏は、日本の農業についての基準となるような著作の英語版を、インドで出版しようと考えていた。出版の容易なアメリカやイギリスではなく、発展途上国であるインドで出版することにこだわっていたのだった。

また、彼は東京にいるインドからの客員研究員や語学留学生に電話をしては、日本で生活する上で何か手助けする事がないかを尋ね、東京に行く度、必ず彼らの元に立ち寄り、学問の面でアドバイスをしたり、問題を抱えている人の手助けをしたりしていた。

彼が去ったことにより、私個人も指導者、同志を失い、わが学部も、学問的に成長するのを助け、帰国後も常に刺激しあってきた大切な同志を失ってしまったのである。インド社会に高い関心を持ち、その抱える問題に心を砕いた、先生であり友である人をインドは失ってしまったのだ。

(インド デリー大学 中国・日本研究学部教師)

訳=吉村未紀子・金沢大学経済学部助手

編集後記

林先生を思い浮かべると、ちょっとやんちゃな、くしゃっとした笑顔が必ず浮かんできます。今回の追悼号編集を通じて、林先生がいかにたくさんの人々から慕われていたかを改めて実感しています。残された私たちは、先生の研究成果と、お人柄・生き方から、これからも多くを学び取っていくことになるでしょう。心よりご冥福をお祈りいたします。(Y)

地域経済ニューズレター 第51号

1999年12月20日発行

発行/金沢大学経済学部地域経済資料室

金沢市角間町 (☎920-1192)

☎ (076) 264-5438

編集/金沢大学経済学部

地域経済ニューズレター編集委員会

印刷所/金沢市昭和町2-2

(有)富士印刷社

☎ 231-2062